

じゅしゅう

秋季彼岸会 厳修



九月二十二日(祝)、盂蘭盆会に引き続き感染防止対策をしっかりと整えて、彼岸会の法要をおつとめさせていただきました。色々なご意見があることは承知しておりますが、できることを精一杯させていただきます、それがお寺の役割であると考えております。

さて、この度のご講師は

大阪府四條畷市より加藤真悟先生です。ご讚題は親鸞

聖人が残してくださった浄土和讃より「慈光はるかにかぶらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を帰命せよ」。現代語訳としては「阿弥陀仏の慈しみの光はひろくあらゆるものを照らし、その光の至り届くところでは、すべてのものが

第18号
(通算358号)

発行元
浄土真宗本願寺派
吉富山 浄覚寺
大阪市平野区
長吉長原3-1-10
06-6790-8350

今月のクイズ

・「浄覚寺」という寺号を本山から約350年前に許可されましたが、それはズバリ何年でしょうか？

・正解は次号にて。
ヒントはPにあります。

喜びの心を得るといわれている。大いなる安らぎと慰めを与える大安慰(阿弥陀仏)に帰命(信順)するがよい。」ということでありましょう。

仏教全体の教えである諸行無常から始まり、一切皆苦へと話が続きます。お釈迦さまは「人生は苦なり」と言われたが、苦しみとは何か、その原因とは何か、逆に幸せとは何なのかということを、詳しくお話しくださいました。

最古の經典の二つに『スッタニパータ』というものがあります。そこには「世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れなく、安穩であること…これがこよなき幸である」とあり、社会のさまざまな出来事の中で心

が揺れ動くことなれば、安心して生きていけますよ



と説かれてあります。けれど私自身を振り返ったときには、損得などに振り回され、常に動揺を作り続け、思い通りにならないが故に苦しんでいる私の姿があります。

阿弥陀さまは、そんな私に努力して変わることを勧められるのではなく、「あなたの中の心を任せてほしい。揺れ動く心がなくなることはないが、どんなことがあってもあなたの傍に寄り添い続けるから」と。もう既に今、働いておられることに気づかせていただきました。ましよう、どのお話でした。

一切の形成されたものは苦しみであるとも
明らかな智慧をもって
観るときに、

人は苦しみから
遠ざかり離れる。

これこそ人が

清らかなる道である。

《タンマパタ》



先月の答え: ① 1480年代です。本願寺第8代、蓮如上人の時代に描かれたようです。

御文章に聞く(第15回)

参考文献：『御文章 ひらがな版を読む』 天岸淨圓著 本願寺出版社

狛すなどり章(一帖第三通)

このうえには・なにとこころえて念
仏申すべきぞなれば、往生はいまの
信力によりて、御たすけありつるか
たじけなき御恩報謝のために、わが
いのちあらんかぎりは・報謝のため
とおもいて・念仏申すべきなり、こ
れを当流の安心決定したる・信心の
行者とは申すべきなり、
あなかしこ あなかしこ

文明三年十二月十八日

今回も御文章(蓮如上人からのお手紙)を味わっていきたいと思います。続けて読んできました「狛すなどり章」も最後の部分となりました。まずは大意からお伝えします。「そのおたすけとは、浄土往生については、おおせを聞くところどころに決

庵

集落を離れたところに建てられた世間から離れて生活をする人が住む質素な建物。庵室ともいう。良寛が暮らした「五合庵」は、新潟県燕市に現存している。

『気になる仏教語辞典』
著・麻田弘潤 誠文堂新光社
仏教にまつわる用語をイラストとわかりやすい言葉で読み解かれています。ぜひお買い求めください。

定していただきます。このことは浄土を自らの目標として生き抜く、真の生き方を開かれることであります。このご恩を仰ぎ、浄土に生まれる者の自覚をもって、生涯念仏につとめてゆく、それを信心決定した者というのです。「本願を信ずるとは、阿弥陀仏を価値観の中心にいただき、その教えにしたがって生きようとする力が恵まれることです。一途な「信心」とは、そのような生き方のことであり、それこそが「すくい」の内容なのです。真に拝むべきものを知らされ、人生の目標を確定し、その実現に向かって生きる、それを真実に生きるということです。さとの浄土を目指し、「いのち」のかぎり、阿弥陀仏を念じつつ生きようと努める。それを「信心の行者」といいます。

編集後記

今月も「じゅごう」をお届け致します。手蘭盆会に引き続き、お彼岸の法要もつとめることができました。今まで当たり前につとめていた法要でありましたが、一座毎におつとめできた喜びと、ご一緒にお聴聞ができた嬉しさをかみしめております。「どうせ死ぬのに、なぜ生きなければならぬのか」という問いにぶつかつたと、彼岸会のご講師が話してくださいました。仏法に遇うとは、思い通りにならない私の苦を自覚させ、そんな私を放つてはおけないという阿弥陀さまの慈悲に気づかされ、私の生きていく道があまりかにされていくことである、このことでした。今を生きていく支えが、そこにはあるのだと思えます。(釋法道)

行事案内

日時・十月十七日(土) 十四時・十九時
行事・永代経法要
場所・長原 浄覚寺
法話・藤本文隆 先生(奈良)
(当日のお参りはお休みをさせていただきます)

この度の永代経法要では、感染防止対策を次の通り行います。三密を避けるため本堂内の換気を行い、参拝人数は堂内25名・境内に15名までとさせていただきます。マスク着用・手指消毒・検温・名簿作成にご協力ください。十九時からの夜座は座席に余裕があります。可能であれば夜にお参りいただければと思います。当日体調がすぐれないときは、ご無理なさらないでください。

